

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成20年8月12日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 一貫制博士課程4年

氏 名 宮 田 寛 章

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	第11回国際民族生物学会		
発表題目	エチオピア西南部高地におけるエンセーテを基盤とした生業システムの潜在力 The Agricultural Potential of the Enset-based Livelihood System in the Highlands of Southwestern Ethiopia		
開催場所	ペルー、クスコ		
渡航期間	平成20年6月19日 ~ 平成20年7月12日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000 円	
	使用した助成金額	250,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	国際線航空費(関空-リマ往復)	127,000円
		燃油サーチャージ	48,700円
		ペルー国内線航空費(リマ-クスコ往復)	32,000円
学会参加登録料		18,200円	
	宿泊料(20泊分)	24,100円	

成果の概要（平成 20 年度国際研究集会派遣）

研究集会名 第 11 回国際民族生物学会
開催場所 ペルー、クスコ
渡航期間 平成 20 年 6 月 19 日～平成 20 年度 7 月 12 日
派遣・報告者 宮田 寛章（アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程 4 年）

報告者が参加した国際民族生物学会は、世界の様々な地域における生物と文化の多様性に関する人々の知識や実践について、情報と事例を共有し、それらについての認識や議論を深めることを目的とした学会である。参加者の出身地域や専門分野は多岐にわたり、当該問題について学際的な学术交流をおこなうことができる。学会は 2 年に 1 度開催されており、第 11 回目にあたる今大会はペルーのクスコにておこなわれた。今大会は特に、地域の人々とコミュニティが、過去から現在に連なる生物的遺産と文化的遺産の総体を管理・保存する際に果たす役割を強化したうえで、在来の生物資源に関する人々の権利と生計を保障していくような議論が中心におこなわれた。

合計 130 にも及ぶ口頭発表及び議論が、「1 . 伝統的農耕景観とコミュニティによる保全地域」、「2 . 先住民・気候変動・適応」、「3 . 民族生物学と伝統的資源に対する権利」、「4 . 生物 文化的多様性を強化するための知識」、「5 . 民族生物学の進展」という 5 つのセッションにておこなわれた。また他にも多岐にわたるテーマのポスター発表やフォーラムなどがおこなわれた。

報告者は第 2 日目に、セッション 5 内に設置された"African Livelihood Systems, Their Modes of Ethnobiological Cognition and Contribution to Nutrition, Health and Ecological Sustainability"と題する分科会に参加し、研究発表と議論をおこなった。この分科会は、地域を生態・社会・文化という様々な側面から総合的に研究する、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）と、人々による多様な生物資源の持続可能な利用を主な研究テーマとする国際研究機関の Bioversity International による共同企画である。当日は、両研究機関に属する研究者たちが、アフリカ地域の生業システム、生態的な民族知識及び環境認識の諸形態、及び人々の生活における栄養・健康・生態学的な持続可能性を促進する実践的貢献などについて、各々のフィールド調査に基づく研究発表をおこない、様々な問題や将来への可能性について活発に議論した。

報告者はエチオピアの庭畑を事例に、上記の分科会のテーマに沿った研究発表をおこなった。家屋に近接した畑である庭畑は、植物資源の多様性の保全をローカルな現場で実践する空間として特に注目されており、過去に開催された大会においても、人類学、生物学、農学などの様々な分野からその見識が深められてきた。これまでの庭畑に関する研究は、種や品種の多様性と、それに対応した人々による利用法の記述にとどまる資源植物学的手法が大勢であり、地域の人々と庭畑の相互関係の諸相を生存のレベルにまで深めて詳し

く描いたり、庭畑がおかれたグローバルかつ地域的な文脈を的確にとらえたりした研究は少なかった。庭畑の研究は、世界各地の事例収集とその表面的な比較研究にとどまってきたといえるだろう。あるいは、多様性の保全という最終目標のみに規定された枠組みで、人々の文化や実践を理解しようとしてきたきらいがある。このような研究の傾向を脱却し、新展開をはかるために、発表では二つの方法論を検討した。一つ目は、庭畑の資源植物の利用法の定性的記述だけでなく、従来看過されてきた資源植物の利用頻度・量などを定量的に記述する生態人類学的アプローチである。これにより庭畑の資源植物と人々との相互作用の実相が浮かび上がり、人々の生計にとって庭畑がどのような空間であるかを描くことが可能となる。二つ目は、このような庭畑の科学実証的理解をふまえたうえで一度それを相対化し、地域の生業形態や社会・文化的背景のなかでその位置を再焦点化することで、地域における庭畑の多重的な意味を明確にするという地域研究的アプローチである。発表では、エチオピア西南部高地における、在来主食作物エンセーテを基盤とした庭畑を事例に、生業システムという視点から、庭畑によって形成される生業システムの潜在力とそれを支える人々の知識や技術を明らかにすることで、以上の二つの方法論の理論的有効性に実証的検討を加えた。発表後の質疑や、議論をおこなうその他の機会の中で、二つの方法論は多くの研究者によって高い評価・支持を受けた。

他の研究発表やフォーラムでは、環境変動と人々の生活への影響、生物多様性や生態学的景観の保全と管理、生態学的な民俗知識の保全、生物資源に対する人々の権利、生態学的知識に対する知的所有権の取り扱いなどの現代的な課題を、実践的な立場から議論したものが多く見うけられた。世界各地からの事例報告は非常に興味深いものが多く、民族生物学の応用的側面について見識を深めることができた。それら大半の議論の基底にあるのは、地域に根ざした“indigenusness”を効果的に活用し、人間と生物及び生態学的環境との調和的な関係の中で、持続可能な地域発展を目指していこうという方針である。

しかし、“indigenusness”を事前に画一化された地域発展のビジョンと短絡的に結びつけ、そのようなビジョンに資するような“indigenusness”だけを重要視するならば、人々の多様な文化や実践を矮小化してしまう危険性もある。地域の生態・社会・文化を総合的に研究する地域研究の視角から、人と生物がとり結ぶ多様な関係の諸相を地道に理解していくような学究的民族生物学と、上記のような実践的民族生物学とが今後も対話・交流していく必要があることを強く実感し、帰国の途についた。